

## 液晶越しのランデブー

竹田彩乃

ぬるくなった星屑のおとぎ話、それは約束へいざなう月夜のテロリスト、あるいは啓蒙の手がかりであるとマチネが告げる。故に、じわりと囁く心臓の口づけが夢見るは罪人へのセレナーデ。ああ、迷える孤独たちよ！ 夜もすがら、君に佇むアンタレスからのスターチスを煌々と抱きしめた。愛に連なる痛みだけが木霊して、僕は群青に揺蕩う。いかにもエントロピーの吐息らしい殺人的な陶醉が、ただとこしえの涙に横たわっている。たとえるならそれは、飽くことのないネオンに揺れる幸福な序章のひとかけだった。さあ、際限のない初恋におもねろう。やがて零れ落ちる命のしずくをカトラリーと仮定して。ここはきつと、ヨハネが生きたロンドのごとき秩序の果てだ。少女は明滅する鼓動に重なる贖罪の中で、さんざめく歌声に目覚める黙示録だったのだから。